

## 国際化時代の幼児教育

荘司 雅子

OME P（世界幼年教育機構）の世界大会が、本年七月十一日から十四日までロンドン大学で開催される。この学会は、三年毎に世界各国で開かれ、乳幼児の保育と教育にかかわるすべての親、保母、教師、行政官が各国から参加して、世界中の乳幼児の幸せと健全な身心の発達のために、保育や教育の方法と内容と行財政について研究し、討論する国際学会である。

世界大会以外に、世界の各地域でもセミナーが開かれている。本年は、OME P日本委員会の主催で、アジアセミナーを四月二十八日から五月一日まで西宮市にある聖和大学と大阪国際交流センターを会場にして開催されることになっている。セミナーの主題は「ア

ジアにおける保育の相互理解と発展」でアジア地域から十か国、約五〇名の参加者が予定されている。

国際理解と平和教育は、かねてからユネスコが強調しており、実験学校をも指定していたが、すべて中等教育の段階で行われてきた。しかし、国際理解と世界の平和の問題は、幼児期から始めなければならないことをOME Pは主張している。幼児期から平和の心を育てることによって、戦争や紛争がある程度避けられる。そのためには、幼児期の保育や教育の内容や方法を国際的な視野から考える必要がある。

平和の心とは自己を愛し、他人を愛し、自己を敬し、他人を敬し、他人と仲よく協力し、協調し、相手

の立場を理解し、思いやりをし、そしてゆずりあう心である。この平和の心が育てられていけば、たとい個人間や国家間で紛争が起こっても、すぐ戦争や暴力に訴えて解決するのではなくて、話し合いや討議討論によって解決することができる。平和の心を日ごろから抱いている人が、政治や経済や外交にたずさわらなければ、少なくとも国家間、民族間の争いは少なくなる。平和教育とは一人でも多くこのような人間をつくる教育である。

ところがその平和の心を育てるには、まず乳幼児期から、親や家族の間で、保育所や幼稚園で乳幼児の発達段階に応じた教育の内容と方法で行われなければならない。たとえば、まず家庭で親子の愛撫の情をもって、幼児に安定感をあたえ、兄弟姉妹間の思いやりやゆずりあいの態度をしつけることから始める。そして保育所や幼稚園では保育や教師が絵本や物語りや遊びを通して友達と仲よくし、協力するように導く。さら

に幼児の理解できる範囲内で外国の友達と仲良くする。言葉や皮膚の違う異国の人々を理解するよう教材や保育の方法を研究しながら、幼児に国際的な感情や感覚を養うように心がけるのである。こうした国際的な感情や感覚が養われれば、成長した後、外国の人々の生活を理解し相互に協力する心が育てられる。

このように幼児期の保育や教育を、従来のように単に自分の家、自分の社会、自分の国に役立つ人間の基礎づくりであると考えるのではなく、もっと国際的な立場で他の民族や他の国民を理解し協力する人間の基礎づくりであると理解しなければならない。これがやがて人類の幸せ、世界の平和をもたらす人間を生み出すことができると思う。われわれは、目下、二十世紀を動かす子どもを育てている。この子どもたちに今から平和の心が育てられておれば、二十一世紀は少なくとも二十世紀のような血なまぐさい世紀にならなくともすむであらう。

(日本保育学会会長)